

長野県植物誌改訂 研究史資料 8：浜 栄助

中村 千賀*

長野県にゆかりのある植物研究者を紹介する連載として、教員を務めながら日本のスミレ属研究に邁進された浜 栄助氏（写真 1）について紹介する。本稿をまとめるにあたり、日本すみれ研究会事務局長の田淵誠也氏には貴重なご意見や資料をいただいた。また資料の収集には長野県長野西高等学校同協会、長野県環境保全研究所にご協力いただいた。厚く御礼申し上げる。

浜 栄助 氏（1925-1996）略歴

1925 年、長野県茅野市永明村（現茅野市ちの）に生まれる。1947 年、東京高等師範学校理科第三部を卒業し、以降教職に従事する。長野県内では諏訪二葉高等学校、岡谷東高等学校などに勤務し、長野西高等学校校長を最後に定年退職する。1955 年以来、日本産スミレ属の研究に取り組む。1964 年 5 月、植樹祭に御来県の上皇・皇后陛下にスミレについて御進講する。1973 年から日本すみれ研究会顧問を務める。1996 年死去（71 才）。

浜 栄助氏は、大正 14 年（1925）、茅野市の農家の長男として生まれた。忙しく働く両親のもと、幼少のころから家事手伝いに励んだが、特に母親は一刻も無駄にすることなく働く人で、その姿に多大な影響を受けたという。長野県諏訪中学校（現諏訪清陵高等学校）時代には、自治、質朴剛健、勤勉努力をモットーに生活し、孤高、峻厳、勤直などの性格形成がなされたとしている。昭和 18 年（1943）に東京高等師範学校理科第三部へ進学するが、戦時下で学生生活を送り、貧困と耐乏に、「我が性格益々鋭敏に、益々烈しく作り上げられていく（後年、後悔の所以なり）。」と後に記している。

師範学校で「ドジョウの冬眠」について研究をし、昭和 22 年（1947）3 月に卒業、最初の赴任地である東京第二師範学校に勤める。昭和 30 年（1955）より長野県諏訪二葉高等学校で 12 年間教鞭をとるが、同僚の生物教諭に地方の植物研究家として知られる小坂忠二郎（シロバナホタル カズラ *Lithospermum zollingeri* A.DC. f. *albidum*



写真 1. 浜 栄助 氏

写真提供：長野県長野西高等学校同協会

(Honda) H.Hara、ホソバウスユキソウ *Leontopodium japonicum* Miq. var. *angustifolium* Honda の発見者）がいた。初年度の春に、彼の案内による東京大学の前川文夫助教授（1908-1984、後に同大教授）のスミレ属の雑種調査に同行したことが、スミレ研究にのめり込むきっかけになったという。記念すべき最初のスミレ属雑種との出会いは、スワキクバスミレ（ヒゴスミレ×ヒカゲスミレ）*Viola x chinoi* F.Maek. ex T.Hashim.（写真 2）であった。この後も前川教授との親交はスミレを通じて深まり、互いの自宅を訪問する間柄となっている。

教員の職務の傍ら、スミレ属の研究に邁進し、諏訪から始まった調査は、長野県内はもとより全国各地、北海道や沖縄、対馬へも及んだ。鋭い観察眼は雑種を見出し、その両親を特定することに特に発揮され、浜氏が発見や確認、命名に携わった雑種は 20 種類以上に及ぶ。さらに自身で、また全国の同好の士の助けを受け、各スミレの分類群を収集し自宅で栽培していた。一時は日本中のほとんどのスミレが揃い、栽培に細心の注意を払う日々だったという。それら生品の観察と集めた資料をもとに、研究を進め、原色図の描画に努めた。

県内でスミレ属の分類の実力者として知られるようになった浜氏は、昭和 39 年（1964）5 月、白樺湖畔での植樹祭に来られた昭和天皇と皇后の両陛下にご進講している。このとき、自身が発見した雑種も含め、約 30 鉢をお見せしたが、方言を交えながらざっくばらんな調子で説明し、打ち解けた雰囲気

* 長野市立博物館分館 戸隠地質化石博物館
〒381-4104 長野県長野市戸隠栃原 3400



写真2. 浜柴助 著「増補 原色日本のスミレ」(2002)中のスワキクハスミレの頁。

気の中で楽しい時間だったとしている。

地道で丁寧な研究の成果は、スミレの道について20年目にして、「原色日本のスミレ」(誠文堂新光社1975、写真2)の大著に結実した。それまで国内で知られていた日本のスミレ属の40種、3亜種、39変種、75品種、および75雑種を掲載している。この図鑑について、同書の冒頭の「推薦のことば」の中で前川教授は、「1図版ごとに、花の各部分や、各種の変異が描かれているのもたのしい。それに各種間に生じた自然雑種を全部追いかけて一々を図におさめたその労力と熱意、というよりはその執念はすさまじいばかりである。全く頭が下がる次第である。」と感嘆している。その言葉の通り、120枚に及ぶ図版には、雌ずいや根、種子、夏葉など各部の形態が細部にわたって一つ一つ丁寧に描かれている。対応する解説の頁では植物体の各部の解説、国内外の分布などの基本情報に加え、毛の多少や葉の質などの種内変異、地理的変異、研究史、さらに雑種については果実の稔性も細かに記されている。また、「スミレ属(*Viola*)の総説」の頁では、前川教授が「迷わせるところが却って気のきいた個所になっている」と称した検索表、雑種の一覧図、また自身が行った果実の裂開の観察記録、種子散布実験による飛距離図も掲載されていて、日本のスミレ属について生物学的特徴を広くまとめている。

この図鑑の発刊はスミレの愛好家に大きな刺激を与えた。「山溪ハンディ図鑑6 日本のスミレ」(山

と溪谷社1996)の著者で写真家のいがりまさしは、自身のスミレ狂いを決定づけたのは、中学生のときにめぐりあった「原色日本のスミレ」であるとしている。また、図鑑に掲載された希少な種や雑種の産地を探し求め、採集し栽培しようとする愛好家の中で、過度な行為が目立つようになったという(田淵2021)。栽培法の進展を望んでいた浜氏であるが、この状況に対して「珍しいものにとりつかれ、先人の後を追いかけてまわして集めることに自己満足をもつといった、興味本位の態度はさけるべきであろう」(浜1981)と戒めている。

同著は浜氏が亡くなられた後、インターネット上で復刊運動がおこったことを契機として、図版19枚が足され、最低限の再編集がなされた上で2002年に増補版が発行された。編集されたのは浜氏が「スミレ仲間の盟友」と呼んだ神山隆之氏である。この増補版には、スミレの有茎種と無茎種との間の交配種について浜氏が書かれた記事も新たに掲載されている。

浜氏はこの図鑑を発刊した後、植物研究雑誌51巻11号の中で、新たな品種や雑種などを中島邦雄氏とともに正式に発表している(浜・中島1976)。それらのうち浜氏が命名したのは以下の17の分類群である。

ミヤマナガハシスミレ *Viola rostrata* Pursh var. *rostrata* form. *alpina* E.Hama 北アルプス八方尾根、1962年。

マダラナガバノタチツボスミレ *Viola ovato-oblonga* (Makino) Makino form. *variegata* E.Hama 大分県湯布院、1963年。

シロバナイブキスミレ *Viola mirabilis* L. var. *subglabra* Ledebour form. *seiichii* E.Hama 小県郡長門町、1967年。

シラユキスミレ *Viola verecunda* A.Gray var. *verecunda* form. *candidissima* Mizush. ex E.Hama et Nackej. 諏訪市産(栽培)、1960年。

シロバナリュウキュウコスミレ *Viola yedoensis* Makino var. *pseudojaponica* (Nakai) T.Hashim. form. *sonoharae* E.Hama 沖縄県名護市産(栽培)、1967年。

ケナシサクラスミレ *Viola hirtipes* S.Moore form. *glabra* E.Hama 木曽郡木祖村塩沢産(栽培)、1964年。

アソヒカゲスミレ *Viola yezoensis* Maxim. var. *asoana* E.Hama 熊本県阿蘇郡久木野村産(栽培)、1965年。

ミドリフジスミレ *Viola tokubuchiana* Makino var. *tokubuchiana* form. *concolor* E.Hama 栃木県日光市小倉山産 (栽培)、1962 年。

シロバナフジスミレ *Viola tokubuchiana* Makino var. *tokubuchiana* form. *lactiflora* E.Hama 栃木県日光市小倉山産 (栽培)、1967 年。

ファイリシハイスミレ *Viola violacea* Makino var. *violacea* form. *versicolor* E.Hama 兵庫県佐用郡船越山産 (栽培)、1965 年。

アカバナシハイスミレ *Viola violacea* Makino var. *violacea* form. *rubra* E.Hama 大分県塚原温泉産 (栽培)、1963 年。

ファイリマキノスミレ *Viola violacea* Makino var. *makinoi* (H.Boiss.) Hiyama ex F.Maekawa. form. *variegata* E.Hama 上伊那郡辰野町小野産 (栽培)、1959 年。

ファイリシナノスミレ *Viola violacea* Makino var. *tanakaeana* (Makino) T.Hashim. form. *okuharae* E.Hama 木曽郡神坂村産 (栽培)、1965 年。

ファイリヒメミヤマスミレ *Viola sieboldii* Maxim. subsp. *boissieuana* (Makino) F.Maek et T.Hashim. var. *boissieuana* form. *variegata* E.Hama 三重県熊野妙法山産 (栽培)、1962 年。

ファイリヤクシマミヤマスミレ *Viola sieboldii* Maxim. subsp. *boissieuana* (Makino) F.Maek. et T.Hashim. var. *pseudoselkirkii* form. *albovariegata* E.Hama 鹿児島県屋久島産 (栽培)、1964 年。

ケイソスミレ *Viola grayi* Fr. et Sav. form. *pubescens* (Nakai) E.Hama 変種から品種への変更。

コマガタケスミレ *Viola x doii* Taken. form. *kisokomana* E.Hama et Nackej. 木曽郡新開村駒ヶ岳山麓産 (栽培)、1964 年。

以上の分類群の他、浜氏が「原色日本のスミレ」(1975)の中で発表した主な新雑種は以下である。学名は長野県植物誌 (1997) に倣った。

オノスミレ：マキノスミレ×マルバスミレ *Viola violacea* var. *makinoi* Hiyama ex F.Maek. x *V. keiskei* Miq. 辰野町小野、1956 年。

アルガスミレ：スミレ×サクラスミレ *Viora mandshurica* W.Becker x *V. hirtipes* S.Moore 諏訪市、1960 年。

キタザワスミレ：コスミレ×ゲンジスミレ *Viola japonica* Langsd. ex Ging. x *V. variegata* Fisch. ex Ging. var. *nipponica* (Makino) F.Maek. 諏訪市北沢、1956 年。

カクマスミレ：アカネスミレ×ゲンジスミレ *Viola phalacrocarpa* Maxim. x *V. variegata* Fisch. ex Ging. var. *nipponica* (Makino) F.Maek. 諏訪市角間新田、1966 年。

フクザワスミレ：ノジスミレ×ゲンジスミレ *Viola yedoensis* Maxim. x *V. variegata* Fisch. ex Ging. var. *nipponica* (Makino) F.Maek. 諏訪市上諏訪福沢山、1967 年。

ニオイオオタチツボスミレ：オオタチツボスミレ×ニオイタチツボスミレ *Viora kusanoana* Makino x *V. obtusa* (Makino) Makino 大町市居谷里、1977 年。

ムラカミタチツボスミレ：オオタチツボスミレ×タチツボスミレ *Viola kusanoana* Makino x *V. grypoceras* A.Gray var. *grypoceras* 新潟県村上市、1964 年。

ワカミヤスミレ：マルバスミレ×エイザンスミレ *Viola keiskei* Miq. x *V. eizanensis* (Makino) Makino 富士見町若宮、1959 年。

フギレアカネスミレ：アカネスミレ×エイザンスミレ *Viola phalacrocarpa* Maxim. x *eizanensis* (Makino) Makino 諏訪市四賀、1956 年。

ファイリフギレシハイスミレ：ファイリシハイスミレ×エイザンスミレ *Viola x taradakensis* Nakai f. *variegata* E.Hama 諏訪市中洲、1964 年。

ハグロスワキクバスミレ：ハグロスミレ×ヒゴスミレ *Viola x chinoi* F.Maek. f. *sordida* Hama 茅野市宮川、1957 年。

キクバヒナスミレ：ヒナスミレ×ヒゴスミレ *Viola tokubuchiana* Makino var. *takedana* (Makino) F.Maek. x *V. chaerophylloides* (Regel) W. Beker var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino f. *sieboldiana* 茅野市宮川、1967 年。

また浜氏が両親を確認、解明したスミレの雑種のうち、県内で発見されたものは以下である。

キソスミレ：スミレ×ゲンジスミレ *Viola x kisoana* Nakai 1925 年、木曽郡上松町で横内斎により発見、中井猛之進命名。奥原弘人、望月精一、浜の研究により 1964 年に両親を解明。

キリガミネスミレ：スミレ×シロスミレ *Viola mandshurica* W.Becker x *V. patrinii* DC. 1960 年、霧ヶ峰にて雑種であることを確認。

フギレミヤマスミレ：ミヤマスミレ×エイザンスミレ *Viola eizanensis* Makino x *V. selkirkii* Pursh ex Goldie 1921 年、赤石岳で小泉秀雄により採集され、中井猛之進によりミヤマスミレの 1 型とし

て発表される。1964 年、霧ヶ峰で浜が採集し雑種であることを解明。

フイリヤシロスマレ：サクラスマレ×フイリシハイスマレ *Viola hirtipes* S.Moore x *violacea* Makino f. *versicolor* 1974 年、下諏訪町で伊東昭介により発見。

また、浜氏が昭和 37 年（1962）に伊豆大島の波浮港で発見したアツバスマレ *Viola mandshurica* W.Becker var. *triangularis* (Fr. et Sav.) Mizush. の二色咲き品種は、園芸界にもたらされ、現在二色アツバスマレとして普及している。

浜氏が、日本の中でも長野県、特に中信地域がスマレの多産地だと知り、スマレ研究を生涯の道と定めたのが、諏訪二葉高等学校に赴任した昭和 30 年（1955）の春のことである。しかし浜氏はスマレ研究だけに情熱を傾けていたわけではない。12 年間の諏訪二葉時代を通して進学係を務め、生徒の学力別にコースをわけ補習を進めるなどして、進学態勢を確立させた。また、同校のスケート部監督として指導にあたり、女子スピードスケートの部門でインターハイ優勝校へと育て上げた。優秀な選手たちを次々に輩出したが、その中には昭和 43 年（1968）にグルノーブルオリンピックに出場する斎藤実子もいる。後に浜氏は諏訪二葉時代を振り返り、進学・スケート・スマレの「3S」に身をけずったと記している。

この頃の猛烈な仕事ぶりがあだとなり、次の赴任地、長野県阿南高等学校では胃潰瘍が悪化し、手術している。ただし術後の静養中にスマレのスケッチを進めている。その後の赴任先では校舎の改装や改築、女子高の共学化、それに伴うグラウンドの拡大などに対して、教頭や校長として尽力した。このように、教職とスマレ研究に対して全力で取り組む姿勢を貫く一方で、しばしば病魔に襲われ、入院や手術を受けている。

最後の勤務地である長野西高等学校の校長時代は、スマレの研究を中断する代わりに、同校の校章「梶の葉」にちなみ、学校の歴史や梶の木（カジノキやコウゾ）について調べ、昭和 60 年（1985）3 月、退職記念に「長野西高等学校 梶の葉物語」を残している。諏訪明神の神紋と同じ梶の葉に、諏訪出身者として縁を感じたという。浜氏が在職中に長野西高の生徒であった卒業生からは、浜氏への印象として、比較的穏やかで親しみやすく、話しは論理的でわかりやすかったと聞く。浜氏の死後にまとめられた遺稿集「はらから」（2002）からは、真面目

でありつつもユーモアのセンスある一面をうかがうことができる。

退職後は休む間もなく「写真集 日本のすみれ」（誠文堂新光社 1987）の編集にスマレ仲間と共に取り組んだ。必要な写真を求めて、対馬や沖縄にも足を延ばし、ときに徹夜の編集作業を行った。地元の区長の仕事もこなし、疲労が積み重なった末、昭和 62 年（1987）に頭部の帯状疱疹に倒れた。その発見、治療の遅れから再起できない状況となり、痛みと薬の副作用により視力、聴力とも低下したまま、闘病生活は 10 年に及んだ。将来は、郷土のスマレを丹念に調べなおし、後世に残る長野県の分布図を作りたいと語っていたが、実現することはなかった。

スマレ研究の道を高い志しと情熱をもって駆け抜けられた浜氏が、特に興味をひかれたのは雑種であった。その理由について、現在のスマレ属の種分化や、雑種を起源とした新しい種の形成にかかわるためと述べている。将来、研究機関に対してはスマレ類の染色体学的研究が進むことを、また、人工交配による雑種の確認にも期待されていた。さらに、雑種がもとなり観賞価値が高い園芸品がうまれること、そしてそれが世界に普及し人々の家の窓辺を飾る存在となることを念願されていた。日本のスマレ属の研究と普及に対して、浜氏は大きな足跡を残したと言えるだろう。なお、浜氏が撮影されたスマレ類の写真のポジフィルム、およそ 1700 枚が、長野県環境保全研究所に収められている。

この原稿は、以下の文献と浜氏の著作をもとに執筆した。

いがりまさし（2004）山溪ハンディ図鑑 6 増補改訂 日本のスマレ。山と溪谷社

河野玉樹（1984）花に生きる 3 スマレの浜栄助さん。

朝日園芸百科 03。朝日新聞社

清水建美監修（1997）長野県植物誌。信濃毎日新聞社

田淵誠也（2021）冊子「山野草の栽培（2）スマレ科」
解題。すみれ 2021: 30-59。日本すみれ研究会

浜 栄助 氏 業績

浜氏が単著の場合はお名前を省略した。

【著書・編著書】

1975 著 原色日本のスマレ。誠文堂新光社

1978 著 生品の絶えた雑種について。鈴木進著、山野草の栽培 [II] スマレ科、御嶽山草会：107-

110

- 1985 著 長野西高等学校 梶の葉物語. 信毎書籍印刷株式会社
 1987 編著 写真集日本のすみれ. 誠文堂新光社
 2002 著 神山隆之増補編集 増補原色日本のスミレ. 誠文堂新光社
 2002 著 はらから (遺稿集). 浜えつ子

【論文・記事等】

- 「長野県植物研究会誌」(長野県植物研究会)
 1970 下伊那のスミレ. 3: 1-12.
 1972 ナンザンスミレについての考察 " 対馬にナンザンスミレをみて ". 5: 15-19
 1973 神山隆之・浜, 薩摩に見出された珍奇なスミレの雑種. 6: 27-29
 1987 南西諸島 [沖縄諸島 (琉球列島) ・薩南諸島] のスミレ. 20: 106-108
 「植物研究雑誌」(ツムラ研究所)
 1976 浜・中島邦雄, 日本産スミレ属雑記. 51(11): 19-24
 「長野県双葉高等学校」
 1960 諏訪地方を中心としたスミレ属. 1-6
 1962 スミレ属の柱頭形 (予報). 1-7
 「生物教育」(日本生物教育学会)
 1962 諏訪地方を中心としたスミレ属について. 3(2): 17-30

「植物採集ニュース」(奥山春季監修)

- 1963 オオバタチツボスミレの新産地 - 長野県カヤの平. 5: 17
 1963 タデスミレを烏帽子岳にさぐる. 9: 34
 1964 シナノスミレとキソスミレの正体. 16: 21
 1967 ヒメスミレサイシン日光男体山に生ず. 29: 37
 「山と博物館」(大町山岳博物館)
 1970 スミレ旅日記一雑種を追って. 15: 1-4 (大町山岳博物館編 (1973) 北アルプス博物誌Ⅱ 植物・地学: 46-53, 信濃路に転載)
 「植物と自然」(ニュー・サイエンス社)
 1972 神山隆之・浜, 山口県および対馬にスミレを探る. 16(4): 27-29
 「花の雑誌 ガーデンライフ」(誠文堂新光社)
 1972 日本のスミレ旅 1 春の信州スミレ地図. 11(3): 32-35
 「新花卉」(タキイ種苗)
 1981 スミレ類の雑種について. 112: 26-29
 「すみれニュース」(日本スミレ同好会)
 1985 浜・伊藤昭介・神山隆之, 兵庫県および岡山県のスミレ調査旅行. 41: 7-8
 1985 四国のミヤマスミレ. 42: 1-3
 1985 ヒトツバエゾスミレの関東以外の分布. 42: 4-5